

# 徳之島の生業複合から「ソテツ地獄」を問いなおす —構築された歴史観と地域社会の歴史認識のズレ—

金城 達也・寺林 暁良

## 論文要旨

本稿は、南西諸島におけるこれまでの歴史観のひとつとして自明に語られることの多かった「ソテツ地獄」という概念を地域社会における実際のソテツ利用から捉えなおすことを目的とした。

南西諸島の近現代史における歴史観のひとつとして、「ソテツ地獄」という用語は広く定着している感がある。しかし、地域社会の日常的な実践から見た場合には、「ソテツ地獄」という歴史観は馴染まない。そのため、半ば自明視されている「ソテツ地獄」という歴史観を地域社会における実際の生活様態から捉えなおし、多元的な価値のもとで明らかにされた歴史観を地域のなかに位置づけなおすことが必要である。

本稿ではまず、「ソテツ地獄」という用語がメディアや誌史料などによってどのように記述されてきたのかを見直しながら、歴史概念が構築されていく過程を明らかにした。そのうえで、徳之島における生業複合の事例からソテツ利用を位置づけなおし、地域社会の生活実践からソテツをめぐる歴史観を捉えなおした。

その結果、これまで半ば自明視されてきた「ソテツ地獄」という歴史観と地域社会におけるソテツ利用をめぐる歴史認識にはズレがあることが明らかになった。本稿で検討してきたように、多面的かつ多元的な価値を明らかにすることで、歴史観の捉え返し、地域社会に根差した歴史認識が可能になると考えられる。

キーワード：「ソテツ地獄」、構築された歴史観、ソテツ、生業複合、多元的な価値

## Reconsider of the "Sotetsu Jigoku" from Combination of Various Subsistence in Tokunoshima Island, Japan : A gap between the constructed historical perspective and the historical perceptions in a community.

Tatsuya KINJO, Akira TERABAYASHI

The purpose of this paper is to reconsider of the historical perspective of the "Sotetsu Jigoku" from actual use of the Sotetsu(*cycas revoluta*: Japanese sago palm) in Nansei-shoto(Nansei Islands: southwestern islands off Kyusyu and in the Okinawan archipelago).

"Sotetsu Jigoku" is supposed to be obvious historical perspective as one of the contemporary-modern history in the Nansei-shoto. However, historical perspective of "Sotetsu Jigoku" does not fit when viewed from the praxis of the community. Therefore, obvious historical perspective as the "Sotetsu Jigoku" should be reconsider. It should be considered from the praxis in a community, and then should be repositioning the historical perspective that has been clarified based on the plural values in a community.

First, in this paper, we have clarified the process that historical concept is constructed while reviewing the term of the "Sotetsu Jigoku" is described by the media and historical materials. Next, we were repositioned the sotetsu use from the case study of combination of various subsistence in Tokunoshima Island. And then, we were reconsider the historical perspective about sotetsu from the praxis in the community.

As a result, we could clarify historical perception about sotetsu use from combination of various subsistence in a community. It was different from historical concepts as a "Sotetsu Jigoku".

We could be reconsider historical perspective and historical perception rooted in a community when was clarified historical perception based on plural values.

Key words : "Sotetsu Jigoku", The constructed historical perspective, Sotetsu, Combination of various subsistence, Plural values

## 1. はじめに

本稿は、南西諸島におけるこれまでの歴史観<sup>1</sup>のひとつとして自明に語られることの多かった「ソテツ地獄」という概念を地域社会における実際のソテツ利用から捉えなおすことを目的とする。

南西諸島の近現代史における歴史観（あるいは「歴史概念」）として、「ソテツ地獄」という用語は広く定着している感がある。南西諸島の地域誌などを繙いてみると、ほとんどの場合には「ソテツ地獄」をとりあげた記述が散見され、歴史概念としての認識の広さを窺わせる。

しかし、地域社会の人々は多様な生業活動の組み合わせのひとつとして戦略的にソテツを利用してきており、その関係性のなかで地域固有の文化を形成してきた。地域社会の日常的な実践からソテツ利用を見た場合には、「ソテツ地獄」という一般的な歴史観を一度疑ってみる必要がある。そのためには、地域社会における実際の生活様態からソテツ利用を捉えなおし、日常的な実践のなかでソテツと人、あるいは社会との関係性を位置づけなおしていくこと、そして地域社会から見た場合の資源イメージを地域のなかに位置づけなおすことが重要だろう。

とはいえ、地域社会におけるソテツ利用に焦点をあてた研究がこれまでにまったくなかったわけではない。上江洲（1985；1987）は徳之島におけるソテツ利用を広範囲にわたって聞き取るとともに、古記録などを読み解きながら、地域社会におけるソテツ利用を民俗学の視点から捉えている。また、盛口・安溪（2009）や安溪（2011a；2011b）は、生業技術という観点から奄美や沖縄にソテツが伝来する過程を考察することで奄美・沖縄史における新たな視点を示し、各地での聞き取りをもとにした聞き書きなどでは地域社会の人々によるソテツ利用を記述して

いる。これらの研究では地域社会における日常的なソテツ利用やそれにとまなう生業技術の多様性などが明らかにされている。

しかしながら、これらの研究はソテツの利用のみに焦点をあてたものがほとんどであるため、人々の生活のなかでソテツがどのように位置づけられていたのかが明らかにされていない。安室(1992)が指摘するように、地域社会における生業活動は複合的に営まれているため、それらのレパートリーや各要素間の関係性を問うことも人々の生業活動の全体を捉えるための重要な要件となる。つまり、地域社会におけるソテツ資源の意味を改めて問いなおすには、人々の生業活動の総体のなかでソテツがどのように位置づけられているのかを明らかにする必要があり、そのうえで資源としてのソテツの役割や意義を位置づけていくことが重要となる。

実際、「ソテツ地獄」という歴史観に対して、近年では「この時代史の副産物ともいべきソテツの禍々しいイメージは、農村生活におけるその実相とはずいぶん異なるものであることを忘れてはいけない。ソテツは(都会育ちのジャーナリストの誇張とは違って)、死ぬよりましだと思ひ詰め命を賭けて食するようなものではなく、農村の日常の食生活を支えた身近な存在だった」(豊見山, 2011: 566)と指摘され、民俗学の分野ではソテツが日常的に利用される自然資源であり、場合によっては命をつなぐ食糧だったことが論じられる(増田, 2003)など、このような視点からソテツの意味づけを問いなおす論調もみられている。

そこで、本稿ではまず、「ソテツ地獄」という用語がメディアや誌史料などによってどのように記述されてきたのかを見直ししながら、外部社会との相互作用によって歴史概念が構築されていく過程を明らかにしていく。そのうえで、奄美群島に属する徳之島における生業活動の組み合わせを事例にソテツ利用を位置づけなおしていく。すなわち、地域社会の日常的な実践という視点からソテツをめぐる歴史観を捉えなおし、ソテツと人、あるいは社会との関係性を掘り起こしながら地域社会の文脈のなかに埋め戻していくことになる。本稿では、地域住民の環境認識や歴史認識を明らかにしていくため、地域社会の人々の生業活動を厚く記述していく。これは、たとえば、関(1997; 2003)が自然保護運動や地域社会の人々の生業活動のあり方から環境認識を明らかにしているように、こうした手法によって地域住民の環境認識(歴史認識)をある程度理解することができると考えられるからである。その結果として、「ソテツ地獄」に代表される、経済社会論で主に語られてきたソテツに関するこれまでの一般的な歴史観に対して、地域社会における日常的な実践から見た場合の歴史認識にはズレがあることを指摘する。

なお、本稿では基本的に、「ソテツ地獄」と称されてきた時代の地域社会における実際の生業活動、あるいは生活戦略のひとつとしてのソテツ利用を中心に論を展開していく。本稿で使用するデータは2011年6月～2012年12月までの期間に断続的に行われた調査に基づくものである。調査期間中は地域住民や行政機関、各種関連団体などに聞き取りを行うとともに参与観察を行い、あわせて文献資料調査を行った。

## 2. 事例地概要

本稿の事例地は鹿児島県の奄美群島に属する徳之島である。徳之島は徳之島町、伊仙町、天城町の3つの自治体から構成される。徳之島町は人口11,846人、世帯数5,275(2012年8月1日現在)<sup>2</sup>、伊仙町は人口7,224人、世帯数3,589(2012年1月現在)<sup>3</sup>、天城町は人口6,631人、

世帯数 3,219(2012年7月1日現在)<sup>4</sup>となっている。本稿の事例地となる集落は基本的に徳之島町と天城町の複数の集落である。

明治期以降の徳之島では稲作やサトウキビ生産などが複合的に行われていた。しかしながら、1960(昭和35)年には2,000haを超えていた水稲作付面積は現在ではほぼゼロになった(鹿児島県大島支庁, 2012)。現在では自家用の米を作る水田が残されているだけであり、主要な生業としての稲作はすでに行われていない。稲作が衰退した要因については諸説あるが、1961(昭和36)年の農業基本法制定や1970(昭和45)年以降の減反政策は稲作の衰退に拍車をかける形となった(小野寺, 2011)。その後、ほとんどの農家は政府買い上げによって価格がある程度保証されているサトウキビ栽培へと転作していった。また、平成期に入ると畜産用の飼料作物や馬鈴薯を栽培する農家も増え、2008年にはどちらの作付面積も1,000haにまで生産を伸ばしている(鹿児島県大島支庁, 2012)。

徳之島の面積は約25,000haである。農地面積は6,900haであり、その6割をサトウキビ畑が占める。島の中央部を南北に走る森林帯の面積は11,000haとなっている(鹿児島県大島支庁, 2012)。

徳之島を含む奄美群島は歴史的に見た場合、時代ごとにさまざまな行政区に編入されてきた。1266年以降琉球の統治下にあった奄美群島は1609年の島津侵攻によって薩摩藩へ服属することになった。薩摩藩は「砂糖キビを藩直轄の特産品として生産にあたらせ、稲作などを禁止する措置を」(西村, 1999:3)とり、奄美群島は「自給的食糧生産を禁止され、換金作物として生産された砂糖キビと本土のコメ(蔵米)と不等価交換的物々交換を強制されていた」(西村, 1999:3)。その後の廃藩置県にいたるまでは「爾來社會制度の上に一大變革を來すこととなり、琉球時代の按司地頭の行政組織を改めて代官制を實施し、貨幣の流通を禁止して物の交換に特殊の賣買を行はしめ、甘蔗栽培を強制して耕作の自由を奪ひたる等、産業經濟上に及ぼした影響は甚大」(昇, 1949:245)であったとされる。

1871(明治4)年の廃藩置県により薩摩藩の支配権が衰退することになり、1875(明治8)年には藩政が廃止された。その後、1908(明治41)年の島嶼町村制施行により亀津村、天城村、伊仙村の3村に区画されるが、東天城村の発足により大正5年には4村になった。

終戦後は米軍政下に置かれ、日本本土の行政とは切り離された。そのような状況がしばらく続き、1953(昭和28)年に日本本土の行政下に復帰することになった。1958(昭和33)年に亀津町と東天城村が合併して徳之島町になるなどして島内の行政区の編成が行われ、現在に至っている。

### 3. 歴史認識の構築プロセス—「ソテツ地獄」の誕生

#### 3.1. ソテツの概要

『沖縄大百科事典』(1983)によるとソテツ(*Cycas revoluta*)は「ソテツ科の常緑椰子状小低木で、高さはおよそ5mになる。幹は太く鱗片状の葉痕におおわれ、単幹または根元付近で分枝する。葉は羽状複葉、幹の先端部に束生し、長さ70~140cm、上面は濃緑色で光沢があり、裂片の先端は棘状である」(沖縄大百科事典刊行事務局, 1983:629)。日本では九州南部および南西諸島に分布し、中国の一部の地域での自然分布も確認されている。

ソテツの実と幹は澱粉原料となるが、有毒配糖体であるサイカシン(cycasin)を含んでいるため(西田ほか, 1955)、食用とするには調製時の毒抜きが不可欠である。そのため、調製工

程で毒抜きがされていない、あるいは不十分であった場合には食用には適さず、中毒を起こすことで知られている。

### 3.2. 「ソテツ地獄」とは何か

沖縄大百科事典(1983)によると、「ソテツ地獄」とは「第一次大戦後の戦後恐慌期から世界大恐慌期の慢性的不況下における沖縄経済および県民生活の極度の窮迫状況を意味する用語」(沖縄大百科事典刊行事務局編, 1983: 630)であり、「米はおろか、芋さえも口にすることができずに、野生のソテツの実や幹を食べてようやくして飢えをしのぐといった悲惨な窮状」(沖縄大百科事典刊行事務局編, 1983: 630)をたとえて表現したものである。このような事態は「『沖縄の歴史のうえでは、くりかえし現れてきた現象であるが、多くは大正末期から昭和初期にかけての県経済の疲弊期に特定して使われる』と説明されるのが一般的」(豊見山, 2011: 566)だとされる。

1914年に勃発した第一次世界大戦によって撤退したヨーロッパ列強に代わり、日本はアジアの市場を独占することになった。軍需品や鉱産物などの大量輸出によって景気は回復し、日本の工業の発達をも促していくことになった。沖縄をはじめとする南西諸島も第一次大戦による好景気に沸き、特産物の砂糖で利益をあげるようになった。しかしその後の黒糖相場の暴落にあった沖縄などの地域は、糖業に依存した社会構造的な脆弱性もあって景気の悪化が県経済全体に波及していくことになる。

1922年以降は沖縄銀行や沖縄産業銀行、那覇商業銀行の3行が相次いで破綻し、1925年にはこの3行の合併により沖縄興業銀行設立されることになった。これらを契機として沖縄は一連の金融危機に追い込まれていった。

この一連の流れに追い討ちをかけるように、1929年にアメリカで発生した世界恐慌の影響が日本経済にも波及し、1930年には日本全国の農村が昭和恐慌に襲われることになった。これらの経済危機は沖縄経済にも影響を及ぼし、畳み掛けるように沖縄経済を逼迫させていった。

第一次世界大戦後から起こったこれらの金融危機は経済・社会を疲弊させ、沖縄をはじめとする南西諸島の人々は、米はもとより常食としていた甘藷さえも確保することが困難な状況に追い込まれることになった。このような一連の流れのなかで、沖縄をはじめとする南西諸島の人々はソテツを食糧として利用し、毒抜きが不十分であったソテツを食用とした家庭では中毒死者を出すなどして生活難を象徴するような状況が作り出されていった。このような状況を受け、当時の新聞記者などによって「ソテツ地獄」という言葉が生み出され、第一次世界大戦後の金融危機を契機とした一連の金融危機の時代は「ソテツ地獄」の時代として定着していくことになった。

そもそもこの用語は新聞報道や沖縄救済論で使用されたものである。しかし、「窮乏した生活は奄美も沖縄と変わりはなく、藩政時代の奄美はなお厳しい重圧に耐えねばなりませんでした」(榮, 2003: 155)といわれるように、当時の慢性的な経済不況が奄美群島にも影響を及ぼしていたことは容易に推察できる。その状況を象徴するように、「昭和4年より続いた日本の経済恐慌は、昭和6年にさらに深刻となり、日本全国をあげて『なべ底景気』とよばれ、同時に奄美諸島では『蘇鉄地獄』と喧伝された」(和泊町誌編集委員会編, 1985: 740)とされている。また、「1929(昭和2)年8月天皇陛下がそてつ地獄=経済不況化の奄美を視察したことで、国



による援助に拍車がかかった」（瀬戸内町誌歴史編纂委員会，2007：486）という記述からは、「ソテツ地獄」と経済不況下の奄美群島が関連付けられていることがわかる。すなわち、「ソテツ地獄」という用語は経済不況下の新聞報道や沖縄救済論で生み出されたものであるにもかかわらず、同じような慢性的な経済不況という社会情勢から見た場合の窮状ぶりからは、南西諸島全体にもあてはめられる概念として現在では位置づけられている。

「ソテツ地獄」という用語が生み出された背景には、沖縄の経済状況の悪化やその後の経済政策に関する動向が深くかかわっている。新聞報道などによって主に使用されてきたこの用語はその後、「この時期に、沖縄社会をおおいつくした極度の疲弊状況が全国的にも注目されるようになり、政府当局や新聞・雑誌記者が視察・調査のためにつぎつぎに来県、沖縄社会の疲弊の原因やその対策をめぐって」（安里ほか，2004：284）沖縄救済論議が展開され、経済政策を求める理論的裏づけや経済政策の規定内容に影響を与えるかたちで多用されていくことになる。なお、沖縄救済論議とは、「大正末期から昭和初期にかけて、恐慌と不況がうち続き、沖縄の〈疲弊〉が問題化して、〈ソテツ地獄〉と評されたころ、その対策をめぐって交わされた論議」（沖縄大百科事典刊行事務局編，1983：443）であり、産業部門における生産基盤の脆弱性や税負担の問題などが争点となっている。この論議は、その後の「沖縄県振興計画」や「奄美群島振興事業」などの経済政策に大きな影響を与えたとされる。

これらのことからわかるように、「ソテツ地獄」という用語は沖縄をはじめとする南西諸島の経済状況の深刻さや住民の生活の窮状ぶりを報じる際に新聞記事中に取り上げられ、その後の沖縄救済論議では経済政策を求める論理のなかに埋め込まれてきたわけである。

その結果、沖縄をはじめとする南西諸島周辺の地域誌などには「そてつ地獄とは主食としての米や雑穀はもちろん、甘藷でも手に入らないので、やむなくそてつを食べるような庶民生活の苦しさを表現した言葉である」（大宜味村史編集委員会編，1979：112-113）という記述や「戦後恐慌から昭和5年代（1930）まで続く慢性的不況は、庶民の生活を飢餓状態に追いこんでいった。一中略一飢えた人々は、調理のための時間的なゆとりもなく、腹をみたすために有毒のソテツも口にしたのであろう。この悲惨な状態を当時のジャーナリズムは『ソテツ地獄』と呼んだ」（東村史編集委員会編，1987：74）という記述がみられるなど、ほとんどの場合には「ソテツ地獄」が取り上げられている。

以上のことを含め、豊見山（2011）が「沖縄近代の暗部を表現する言葉として『ソテツ地獄』を超えるインパクトをもつものは少ないだろう一中略一思うに、ソテツ地獄という言葉は、戦後米軍占領期に喧伝された『イモ・ハダシ』論<sup>5</sup>と同様に、沖縄にかけられた強力な呪文のようなもの—沖縄はいつも貧困と飢餓の瀬戸際に立つ非力な存在だという—かもしれない」（豊見山，2011：566-567）というように、現在でも「ソテツ地獄」という用語は南西諸島周辺の時代区分のひとつとして定着されており、同時にソテツに対する資源イメージもネガティブなものとして印象づけられていると考えられる。

### 3.3. 「ソテツ地獄」はどう記述されてきたか

以上見たように、「ソテツ地獄」という用語は沖縄や奄美、あるいは南西諸島における社会情勢を取り上げた新聞報道などを背景として生み出されてきたものである。ここでは当時の新聞記事などで住民の生活状況がどのように報道され、その後の文献などでは「ソテツ地獄」が

どう語られているのかをいくつかの事例によって確認しておきたい。

1925（大正14）年8月2日付の鹿児島朝日新聞には「生活難の悲劇 蘇鐵の中毒から 一族六名が枕を並べて死亡 同情すべき大島の惨状」という見出しによる記事が掲載されている（鹿児島朝日新聞，1925）。

縣下大島郡笠利村では昨年の防風，大島紬及び黒糖の下落から大打撃を被って生活苦の惨状目もあてられない，村民の多くは豊富な天産の蘇鐵を唯一の食料としてその日々を送って居る有様である，然るに此の蘇鐵に有毒素あり夫れがため一族六名が中毒して死者を出した悲劇がある。同村の須野常田フクチヨ（四四）方では兼て貯蔵した蘇鐵に煤の混入したのを知らず去日之を粉なにして米を混じ粥をつくり前記フクチヨが始め何気なく喰つたところ忽ち腹痛を訴へた，同時に吐くやら下痢を催すやら約二時間苦しんだが遂に死亡した，然るにフクチヨが発病に呼び集められた親族の常田ヤス（三二）常田クニ（三二）同人長男武利（四つ）常田〇武長女竹子（六つ）重義則妻ミツ（二八）の五名はフクチヨの死因が蘇鐵にあることを知らず炊きたての粥を昼食にした，之れがまた中毒を起し程なくハタハ倒れ苦痛を訴えつゝ前記常田クマを残して死亡シクマもなほ重態で生命が危い（大島）

（大正14年8月2日付 鹿児島朝日新聞）

また，1927（昭和2）年8月9日付の南海日日新聞には「貧困に喘く蘇鐵地獄へ 勅使を差遣はさる 主務官視察して具さに奏上」という見出しによる記事が掲載され，当時の奄美地域の生活の窮状ぶりが取り上げられている。

木下幸主務官は聖旨を奉じて中島支庁長の案内で近辺における最も貧困なる部落を訪れ蘇鐵の実を実地に見蘇鐵味噌などを食して午後二時帰艦して具さに奏上した「これは眞に大島の蘇鐵地獄をお知り給わんとする聖旨に外ならぬ」と木下事務官謹話した。

（昭和2年8月9日付 南海日日新聞）

さらに，その後の沖縄救済論議のひとつとして編まれた『沖縄救済論集』（湧上編，1969）では「ソテツ地獄」という用語が多用されている。たとえば，同書に収録されている東京日日新聞記者の新妻莞による「琉球を訪ねて」のなかには「どうせ山腹の段々はたけである。ろくないもだつて出っこない。自然外米を買って食ふ。若し外米を買う金も無い場合へコツク腹を何でゴマカスか—野生の蘇鉄あれを取って，まづ実を食ひ幹の白いところをきざんでほし，粉にしてねって食ふ。ウマイもマズイもあつたものではない。往々にして中毒即死と来るか死んだら天国覚悟の上で，はては葉やくきまでも食つてしまふ。これをこれ蘇鉄地獄と名づける」（新妻，1969：15）という記述があり，論集全体を通して沖縄の経済的疲弊や生活の窮状などを訴える内容となっている。

これらの社会的動向は当時の社会情勢や経済状況を論じる場合のひとつの時代区分としてすでに定着されており，沖縄や奄美などの周辺地域における近現代史を論じる場合の歴史観のひとつとして扱われる場合が多い。たとえば，奄美群島の近現代史や戦後の奄美政策を論じている西村（1993；2007）による著書では，「近現代における『奄美処分』政策」や「大正・昭和

前期の産業経済の動向」を説明する概念として「ソテツ地獄」という歴史概念が使用されている。

以上のことからわかるように、「ソテツ地獄」という用語は沖縄や奄美などの社会情勢を取り上げた新聞記事などによって報じられるなかで、沖縄救済論議などでも使用され、次第に南西諸島全体に共通する歴史概念として構築されてきたものだと見える。

このような現象は、社会学で提起され、近年では領域横断的に議論が展開されている社会構築主義的な捉え方をするとわかりやすい。つまり、社会現象や社会的な事実は客観的に存在しているものではなく、人々の相互作用によって社会的につくられていくものとして捉える立場であり（平・中河編，2006）、「ソテツ地獄」という歴史概念もまた、慢性的な経済不況という社会現象を説明するための言説を媒介として構築されてきたものと位置づけることができる。

すなわち、「1920年代から30年代初頭までの経済不況＝『ソテツ地獄』は、第一次世界大戦後の日本資本主義をおそった世界恐慌の沖縄的発現形態であった」（安里ほか，2004：278）わけであり、それはあくまでも沖縄をはじめとする南西諸島における経済社会論のなかで語られてきたものである。大阪毎日新聞記者の下田将美が沖縄救済論のなかで「いはゆる蘇鉄地獄なる名によつての琉球経済的疲弊が世に伝えられて以来、政府も民間も南國の島々に對する注意を新にした。一中略一輿論の力は偉大である。琉球は救済の手に抱かれた」（下田，1969：85）と記述していることから窺えるように、言い換えれば、経済不況という社会情勢から脱却するための戦略的な概念として利用されるなかで、「ソテツ地獄」という概念が社会的に構築されてきたということができる。

沖縄県竹富島における重要伝統的建造物群保存地区選定の際の「歴史」のあり方からは、必ずしも史実とは合致しないにせよ、経験にもとづいた選択によって「歴史」が社会的につくられていくことを窺い知ることができる（福田，1996；森田，1997）。その意味では、「ソテツ地獄」という「歴史」もまた、当時の新聞記者や救済論者などによって表象化されて社会的に構築されてきたものだと見える。

つまり、「ソテツ地獄」という用語もまた、地域社会における日常的なソテツ利用から生成されてきたものではないということであり、その歴史観は必ずしも地域社会におけるソテツと人、社会との関係性を表したものではないということである。

## 4. 地域社会における生業活動の組み合わせとソテツ利用

### 4.1. 徳之島における生業活動の組み合わせ

それでは次に、以上のような社会情勢を表すために描かれてきた「ソテツ地獄」に対し、地域社会の人々がソテツに対して抱いてきたイメージを明らかにするため、実際のソテツの利用を多様な生業の組み合わせの中から確認していきたい。

明治期以降の徳之島では稲作が主要な生業として確立し、あわせてサトウキビ生産も行われるなど、複合的な生業が行われていた。また、日常生活においては山野川海から得られる多様な自然資源も利用されてきた。ソテツの利用もそのなかのひとつとして位置づけられる。第二次世界大戦後には食糧難の時代もあったが、1953（昭和28）年に本土復帰を果たすと、再び稲作とサトウキビ生産による複合的な生業が展開された。詳細は時代によって異なる場合もあるが、ここでは特に、明治期以降から昭和中期頃にかけてのモデル的な生業複合のかたちを中心



に記述を進めていく。

徳之島では昭和40年代中頃まではほとんどの家庭が水田稲作を営んでいた。また、畑にはサトウキビやイモなどの農作物も植えられていた。その頃の農作物のほとんどは自家用のものであった。

旧暦2月中旬頃になると、集落周辺の木々に新緑が芽生えはじめる。同じ頃、稲の種もみを漬けはじめた。その後、あらかじめ準備を済ませておいた苗代へ種もみを移し、2～3月頃には水田へ植え付けられた。収穫の時期は作付形態によって異なる。一期作のみを作付けする家庭は8～9月初旬に稲を収穫した。二期作を営んでいた家庭では7～8月頃には一期作目の稲を収穫し、その後すぐに二期作目の稲を植え付けて11～12月には収穫した。

サトウキビは春植えと夏植えに加えて株出しでの作付けが行われていた。とはいえ、どちらも必ず植えるというわけではなく、基本的には一期作で営まれていた。畑にはイモも植えられていた。畑地の半分ほどにはイモが栽培されており、食糧用と家畜の飼料用に使われていた。そのほかにも麦や野菜類などの作物が栽培されていた。すなわち、畑の使い方によってサトウキビの植え付けの仕方が決められていたわけである。

サトウキビの収穫は3～4月頃である。田植えもいよいよ終盤に差し掛かると、ちょうど同じ頃に製糖期を迎えるのである。田植えの終わり頃と製糖期がほとんど重なるため、この時期は特に忙しい日々を送ることになる。つまり田植えをしながら製糖もするという日々が続くのである。これらの作業が一段落つくと、稲の収穫までの期間は農作業以外に費やす時間に余裕が持てる生活になった。

稲作とサトウキビ生産による砂糖製造は明治期以降から昭和後半期にかけての主要な生業のひとつとして位置づけられる。沿岸集落では漁業も重要な生産手段であった。しかしながら、それらの生産サイクルは必ずしも実際の生活サイクルとは合致せず、徳之島の人々は特有の生活戦略を持って柔軟に対応してきた。それらの営みは個人的なものである場合もあれば集団的なものである場合もあるが、結果として主要な生業の合間に行う営みとして生活を支えてきた。

このような営みが行われる場所は山や川、海などあらゆる空間が利用される。水田のドジョウやフナ、タニシやヌマエビなどをはじめ、山での山菜採りや狩猟、川漁、サンゴ礁での採貝採草（藻）などはその代表的なものである。特にサンゴ礁での採貝採草（藻）は現在でも頻繁に行われており、干潮の時間帯にはそのような光景を観察することができる。これらの営みは主要な生業の合間に行われるものがほとんどであり、基本的には住民相互の楽しみなどとして行われる場合が多い。しかしこのような営みは必ずしも楽しみとして行われたものではなく、なかには主要な生業のサイクルに実際の生活が間に合わないときの“つなぎ”として利用される場合もあった。

田植えや製糖が終わると、稲の収穫時期までは農作業に余裕が出る。このことは、裏を返せば日常の仕事量が減ることを意味するため、この時期は生活をしていく手段をほかに編み出さなければならない時期でもある。

たとえば徳之島のある集落では、主要な生業が一段落ついた時期に近隣沿岸集落の漁業者の漁に参加させてもらうことで生計を立てていた家庭がある。農閑期にあたる5～7月の2～3ヵ月間はちょうどトビウオの漁期にあたるため、追い込み漁の一員として参加することがあった。

「うまくいったもんでね。陸に食糧がないときに魚が捕れた。それで食いつないだ状況があった」<sup>6</sup>

そうすることで主要な生業とはべつに生計活動を生み出し、生活を成り立たせていた。すなわち、稲作や畑作を主要な生業に位置づけながらも、農閑期にはさまざまな生業活動を組み合わせながら利用し、生活を営んできたといえる。

## 4.2. 徳之島におけるソテツ利用

### 4.2.1. 徳之島とソテツ

徳之島にソテツがいつ頃入ってきたかについては諸説ある。そのなかのひとつとして『徳之島小史』（1917）には次のような記録が掲載されている。

射的の名人はじめて蘇鉄を持来る

今を去ること四百年前手々村に政勝と云ふ射的の名人あり大島諸鈍に開催されし射的大会へ選手に抜擢せられて出會し数百間の先方にある而かも風に動いて止まざる「サンキラ」（植物名）を一回にて一寸、二回にて二寸、三回にて三寸、四回にて四寸、五回にて五寸、射切りければ大に賞讃せられ城主より賞として小銃を授けらる政勝喜ぶかと思ふと之を断り庭園にある蘇鉄を与へられよと謂ふ城主は政勝の謂ふが儘々与へたり政勝之を持帰へりて手々の自宅に植附けたり之れ当島蘇鉄の元祖なり其蘇鉄は今猶轟々として昔を語り居るものの如し。

（坂井友直，1917，『徳之島小史』：89）

以上のように、徳之島にソテツが入ってきた経路は伝承のレベルで伝えられており、現在でも政勝が持ち帰ったとされるソテツが植えられている屋敷跡を確認することができる。

琉球王府時代には、当時の為政者である蔡温によってソテツの植樹が指導されている（仲地ほか，1983）。南西諸島の各地域にソテツが植樹されていくのは政治的には蔡温による指導が大きいと思われ、1734年に以下のような通達がなされている。

#### 貯

- 一．凶年之節年貢致未進其身も及飢候儀、畢竟常式貯無之故ニ而候。依之徒之費不仕随分守儉約、連々申渡置候通り年々貯え仕候儀、油断有間敷事。
- 一．蘇鉄之儀凶年之補ニ相成、別而重宝之物ニ候間弥漸々植重候様可致候。拵様は別さつニ記相渡候通可仕事。
- 一．はんつ芋之儀、余計有之節は干調飯米之貯可致置候。干調候仕様は、去亥年別冊ニ記渡置候通り可相調事。

（仲地ほか，1983，『日本農書全集 34』「農務帳」：11）

以上のように、蔡温によるソテツ植樹の指導は『農務帳』のなかの「貯」に記載されている。その内容は仲地ら（1983）の訳に倣うと「そてつは凶作の年の補助食として特別に重宝なものである、つぎつぎと植え続けるようにすること。その調理法は、別冊<sup>7</sup>に書いて渡したように

すること」(仲地ほか, 1983: 11)ということになる。すなわち, この時代には救荒作物としてソテツが植樹されていたことがわかる。その後は食用としてだけでなく, 日常生活のなかの生活用具(民具)や遊び道具などとしても利用されるなど, ソテツの利用方法が多様化してきた。

#### 4.2.2. ソテツ利用の多様性

徳之島の人々は複数の生業活動を組み合わせることによって生活を組み立ててきたことはすでに述べた。主要な生業によって生産された農作物や魚介類は現金収入源になったり, 場合によっては物々交換の対象になったりした。

現在の徳之島を見渡してみると, 多くの畑地の畦にはソテツが植えられており, 隣接する畑との境界線として機能している。歴史的に見た場合, 徳之島のほとんどの家庭では畑の周りに植えられたソテツが利用されてきた。ここでは特に, 藩政以降から昭和後半期にかけてのソテツの利用方法を幅広く記述していくとともに, 現在における利用方法も参照しながら論じていく。そのなかで, 食用としてのソテツ利用を含め, 徳之島ではソテツがどのように利用されていたのかを見ていきながら, 地域社会の日常生活におけるソテツ利用のバラエティを明らかにしていきたい。

##### 4.2.2.1. 娯楽のなかのソテツ

徳富(1994)によると, 子どもの遊び道具としてソテツの種子が利用されている。「実のどがった部分を径1cmほど切断し, 中身を全部取り出す」(徳富, 1994: 78)と笛を作ることができた。また, 種子を割って中身を取り出し, 錐で殻に穴をあけてミズグルマ(水車)を作って遊ぶことがあった。これを水が流れる場所に入れると回転するため, 子供の玩具として利用されていた<sup>8</sup>。運動会の玉入れ競争や鈴割りの一部にもソテツの種子は利用されており, そのときに使用する種子は各家庭から持参してきたものが使用されていた<sup>9</sup>。さらには種子に付着している綿を集めて丸め, そのなかに種子を入れて周囲に糸を巻いて固めていくと毬を作ることができる<sup>10</sup>。これもまた子どもたちの遊び道具として各集落で作られていたものである。すなわち, ソテツは玩具の材料に使われるなど, 娯楽を楽しむための素材として重要な資源であった。

##### 4.2.2.2. ソテツと民具

ソテツの葉や種子は装飾品としても利用されることがあった。家の門や行事の際の舞台などをソテツの葉で飾りつけたり, 種子は人形やアクセサリーを作る材料にもなったりした。また, ソテツの種子を砕き, 布に包んで傷口にあてれば膿を吸い出したり殺菌効果があったりするため, 薬用としても利用されていた。祭りなどのときにはソテツの葉を切り取って葉柄部分を残したものを太鼓の枹にしていた。これを2本重ねて使うことで音に厚みが出る。葉を何枚か重ねると箒になり, 土間などを掃くときには便利であった。ソテツの葉を幹から引き抜き, 交互に編んでいくとカゴができあがる。これは一輪挿しにしたり, 捕まえたカナブンやクワガタなどを入れる虫かごとして利用するなど, 使い方はさまざまであった<sup>11</sup>。

#### 4.2.2.3. ソテツを使う技術と知識

畑の畦に植えられたソテツは、隣接する畑との境界線になるだけでなく、海から吹いてくる潮風や台風などの時期の暴風から農作物を守る役割を果たしてきた。また、ソテツを畑の周りに植えることで、農地からの土砂の流失を防いでいる。

青葉は農作物の肥料としても使われていた。青葉を刻んで水田に撒いたりする場合もあれば、刻まずに水田のなかに足でそのまま踏み込んだりしていた。畑地に撒く場合にも青葉を荒く刻んだものを使った。ソテツ葉の農作物肥料としての利用に関しては、奄美群島を調査した和田（1982）によっても明らかにされている。また、種子を採取した際にふるい落とすサヤも同様に農作物の肥料として利用されていた。

葉野菜などの農作物が芽を出したばかりの頃には、ひとつひとつの農作物の周りに幹から切り取った葉を挿し込んでいく。芽が出たばかりの作物は風の影響を受けやすいため、ある程度根づくまでは防風のために用いられる。

枯れ葉と種子の殻は主に燃料用として重宝されていた。薪炭が燃料として利用されていた頃には、これらを焚きつけとして用いられていた。どちらも燃えるのが早いため、風呂焚きや炊事の際には良く利用されていた。

幕末から明治初期の奄美地域における民衆生活が記述された『南島雑話』（1984）の「養蚕の事」にはソテツの葉に蚕の繭をかけた図が掲載されている（「蘇鉄の葉に繭を掛たる図」）。このことから、ソテツは養蚕などの生業とも深いかかわりをもっていたことがわかる。

戦後すぐの時代には、海外からソテツを買いつけに来た商人にソテツの種子や幹を売ることによって現金を得ることがあった。そのときに売買の対象となっていたのはソテツの種子をはじめ、比較的小さい幹や不定芽だった。集落の区長を介して中国や台湾から来た商人と取り引きし、そのまま海外へ輸出された。現金獲得の手段に乏しかった当時においては、このような取り引きは貴重な現金収入源となっていた。また、ソテツの種子をめぐっては集落内外との取引も行われ、食糧難や現金の獲得が困難だった時代には物々交換を介して社会関係が築かれていた（金城・寺林，2012）。

#### 4.2.2.4. ソテツの食文化

メディアの中でも描かれてきたように、昭和初期の経済恐慌や農作物が不作の年などには救荒作物としてソテツは重宝され、食用として利用されてきた。凶作の年に食用とされていたのは基本的にはドテと呼ばれるソテツの幹の部分である。ソテツをドテごと引き抜き、中心部にある芯の部分を毒抜き<sup>12</sup>して粉末化し、団子やお粥にして食べていた。また、戦後すぐの時代も食糧不足が深刻であった。徳之島では戦前の凶作の年と同様に戦後すぐの時代にもドテの部分は重宝され、毒抜きの作業をした後に団子やお粥にして食べるのが一般的であった。また、種子がある場合には採取し、2つに割って取り出した中身を毒抜きして粉末化し、お粥などに混ぜて食用としていた。

ただし、ソテツは救荒作物として利用されてきただけではない。日常生活においてはソテツの種子を利用した味噌づくりなどが行われていた。ソテツ味噌はナリミソやナイミソと呼ばれ、基本的にはソテツの種子を利用して作られていた。ナリミソは各家庭の依頼があった際に隣近所の家との共同作業で作られる場合が多かった。ナリミソを作るための種子採取から味

噌を作るまでの共同作業をナエヌギやナイヌギといった。こうして依頼のあった家庭のソテツから共同作業で種子を採取し、味噌作りが行われた。

焼酎の原料としてもソテツの種子は利用されていた。製粉した種子を大豆と混ぜて発酵させ、麴ができると黒糖を混ぜて発酵を促す。それを冷却して落ちてきた滴を集めて造っていた。しかし当時は焼酎づくりが禁じられていたため、税務署の監視が厳しかった。そのため、焼酎を造ったあとは畑などに隠し、必要な分だけを取り出していた。

#### 4.2.2.5. 現在におけるソテツ利用

日常生活のなかでソテツはさまざまな用途で利用されてきたが、農業の機械化や昭和後半期から本格的にはじまった土地改良事業などの影響もあり、ほとんどの集落では畑の畦に植えられたソテツが取り除かれていくことになった。その結果、これまでのソテツ利用のなかには衰退したものもある。しかし、現在も畑にソテツを残し続けている集落では、ソテツの種子をめぐる海外との交易関係が形成されるなど、新たな社会関係が構築されている。

徳之島では現在でも一部の人々によってソテツ味噌が造られている。町営の加工センターで製造されたソテツ味噌は地元の小売店などで販売されたり、個人的な流通経路を獲得することによって販売されたりしている。また、現在でも畑の周囲に植えられたソテツは隣接する畑との境界線になっており、潮風害などから農作物を守る機能も維持されている。葉野菜などの防風柵としての利用も散見され、現在の用途も多岐にわたっている。

近年においては、街路樹・観葉植物として、あるいは地球環境問題や地域環境保全への意識の高まりを背景とした砂漠緑化用として、地域内の中間業者を介したソテツの種子をめぐる海外との交易関係が築かれている<sup>13</sup>。各家庭でソテツの種子を採集して中間業者に引き渡した後、地域外のブローカーを通して海外へと輸出されていく。これによって各家庭では現金収入を得ることになり、現在におけるソテツの種子採集は副業のひとつとして位置づけられている。なお、2008年12月26日付の日本経済新聞や2008年3月17日付の西部読売新聞などによると、海外の輸出先では砂漠の緑化や街路樹用にソテツの種子が利用されている。景観保全をはじめ、地球温暖化や砂漠化などの地球環境問題を解決する策のひとつとしてソテツの種子が期待されている。

### 5. 語りの中のソテツ利用

ここまで、新聞報道や沖縄救済論議などによって「ソテツ地獄」という歴史観が構築される過程を分析するなかで、すでにいくつかの地域誌をはじめとする誌史料などにも言及してきたが、ここではまず、本稿の事例地である徳之島の地域誌では「ソテツ地獄」という歴史概念がどのように扱われているかをみていきたい。『徳之島町誌』（1970）や『伊仙町誌』（1978）には、「昭和4年より続いた日本の経済恐慌は、昭和6年に更に深刻となり、日本全国をあげて『なべ底景気』とよばれ、同時に奄美諸島では『蘇鉄地獄』と喧伝された。米はあっても買う金廻りが悪く、食生活は総て蘇鉄の実から幹まで粉にして食べるようになったので蘇鉄地獄と自他ともに平然と言えるほど、互いにこれを当然としていたのである」（徳之島町誌編集委員会、1970：175；伊仙町誌編さん委員会、1978：235；天城町役場、1978：839）という記述が掲載されている。この部分だけをみてみると、徳之島の人々が持つソテツに対する認識は「ソ



テツ地獄」という言葉で表象されてきたようなネガティブなものだと印象づけられてしまうだろう。しかしながら、昭和初期の経済情勢を説明するものとしてこれらの文章が書かれていることや、その冒頭部分で「昭和4年に始まった世界経済恐慌の波及で、奄美諸島も経済的に窮乏に陥り、住民の生活は『蘇鉄地獄』と新聞雑誌に書かれるほど、苦しい生活においこまれた」（徳之島町誌編纂委員会，1970：172；伊仙町誌編さん委員会，1978：232；天城町役場，1978：828）という記述が掲載されていることから、地域社会独自の歴史認識でなく、新聞報道などのメディアによって構築されてきた歴史観が一般的な歴史認識として採用されていることは明らかである<sup>14</sup>。したがって、これらの地域誌のなかで描かれているソテツに対する認識もまた、地域社会の人々の歴史認識とは異なるものだと考えられる。すなわち、これまで見てきたように、社会的に構築された「ソテツ地獄」という歴史観がすでに社会一般に定着したあとに、これを援用するかたちでソテツに対する歴史観が示されているものと位置づけられるわけである。これらのことから、地域社会の人々のソテツに対する歴史認識として地域誌の表現をそのままあてはめることは妥当ではないといえるだろう。

それでは、すでに見てきたように、多様な利用を行う中で、徳之島の人々はソテツをどのような自然資源として認識してきたのであろうか。ここでは、聞き取り調査によって得られた情報の中から、人々のソテツに対する認識を明らかにしていきたい。そのための方法として、ここでは地域社会の人々の「語り」に注目する。そうすることで、日常生活で実際にソテツを利用するなかで生成されてきた地域社会の人々のソテツに対する認識を捉えることができると考えられるためである。すなわち、地域社会の人々の日常的な実践に注目しながら外部社会から与えられてきた歴史観を相対化していくことで、地域社会の人々の「歴史認識」から社会的に構築された「歴史観」を捉え返すことができると考えられるわけである。

徳之島の人々は、経済不況や飢饉の年などの食糧難の時代にソテツを食用として利用してきただけでなく、時代の趨勢に応じてさまざまな局面で利用方法を変えたり組み合わせたりしながら社会環境の変化に柔軟に対応してきた。

「時代によって使い方は変わるけど昔からやっぱり助かってるよ。お金になったりね」<sup>15</sup>

徳之島の人々は、度重なる社会環境の変化を経験した際にも、新たな社会関係を築き上げながらソテツの利用方法を柔軟に変えていくことで継続的にソテツを利用してきたわけである。たとえば、時代の趨勢にあわせて食料や民具としての需要が減少したり、地域内の交易関係が衰退したりしても、地球環境問題や地域環境（景観）保全を契機にソテツの種子をめぐる海外との交易関係が構築されているのはその一例として位置づけることができるだろう。また、「ソテツはいろいろ使い道がある。食糧にしたり。やっぱり食糧不足のときなんかはこのソテツの実で助かってるんですよ」<sup>16</sup>という語りからは、食用としてだけでなく、生活の中のさまざまな局面で利用することができる資源として捉えられていることがわかる。さらに、こうした関係性によって継続的に利用されてきたソテツに対する地域社会の人々の認識は、共時的な認識にとどまらず、世代をこえて、通時的にも共有されるものとなっている。

「昔は親なんかが一升いくらかで売って、全島から買いに来たよ。『だからソテツは大事

に『せんといかんよ』とか親は話すよ。今もそうだけど、昔から助けられてるよ」<sup>17</sup>

絶えず繰り返す社会環境の変化のなかで、ソテツは救荒作物や日常食として自給的に利用されたり、換金用の資源や物々交換用の資源として利用されたりするなど、さまざまな時代の社会背景にあわせてその価値が組みかえられてきたわけである。

以上のような語りからもわかるように、日常生活あるいは生業活動などと深いかかわりをもちながら利用されるなかで、ソテツは生活の「助け」になる重要な資源として位置づけられている。逆説的になるが、これらのことは、時代の趨勢にあわせて社会関係を再構築したり、地域内外の価値を地域社会の価値観とうまくすり合わせたりしながら、社会環境の変化に柔軟に対応してきた地域住民の順応性や柔軟性がソテツとの関係性を担保してきたことを示唆している。こうした関係性によって地域社会におけるソテツの利用が継続的に行われてきており、ソテツと人、社会との関係性が継続されているものだと考えられるわけである。こうした関係の連続性によって、いつの時代においても「助け」という認識が生成されてきたし、受け継がれてきたわけである。すなわち、ソテツそのものの存在が「助け」として機能してきただけでなく、さまざまな環境変化のなかで、柔軟な対応をとることによってソテツを継続的に利用してきた地域住民の関係性のなかで、ソテツに対する「助け」という認識や価値が生成されてきたと考えられるわけである。

さて、これまで示してきたように、ソテツの資源としての価値は、時代に合わせて変化を繰り返してきたが、こうしたなかでソテツは、生活実践の歴史の中でポジティブに語られる対象となっている。これは、メディアや誌史料の中で「ソテツ地獄」としてネガティブにラベリングされてきたこととは全くもって対照的である。

自然資源をめぐる歴史認識は、どのような視点から対象を観察したり描き出したりするかで大きく異なってくる。そのため、歴史のさまざまな担い手による多面的かつ多元的な価値を拾い上げていくことが必要となる。言い換えれば、「ソテツ地獄」という歴史観は当事者不在のまま価値づけされてきたともいえる。その結果、上述の語りからも窺えるように、実際にソテツを利用してきた地域社会の人々との歴史認識とはズレが生じていると考えられる。

## 6. 考察—むすびにかえて

本稿は、南西諸島におけるこれまでの歴史観のひとつとして自明に語られることの多かった「ソテツ地獄」という概念を地域社会における実際のソテツ利用から捉えなおすことを目的としたものであった。

本稿ではまず、沖縄や奄美をはじめとする南西諸島に定着している「ソテツ地獄」という歴史観が社会的にどのように構築されてきたのかを検討してきた。「ソテツ地獄」という言葉は、経済不況下における住民の窮状を取り上げた新聞記事や救済論議、その後の経済社会論などでは、地域社会におけるソテツ利用の多様性や生業活動との関連性がほとんど考慮されないまま生成されてきた。この概念の形成過程においては、一部の悲惨な状況を取り上げることによって象徴化され、その後の経済政策を求める際の戦略的概念として利用されてきた。すなわち、「ソテツ地獄」という概念は偏った歴史観によって構築されてきたものであり、そこからは住民の実際の生活という視点がこぼれ落ちているわけである。

それに対し、地域社会における実際のソテツ利用を生業活動全体のなかで関連付けながら、地域社会の文脈からソテツと人、社会との関係性を明らかにしてきた。その結果、半ば自明視されてきた「ソテツ地獄」という一般的な歴史観と地域社会の文脈から見た場合の歴史認識にはズレがあることを指摘した。

ここで注意しておきたいのは、本稿は経済社会論などからのアプローチによる分析や当該地域における経済政策の不必要性を指摘しているわけではないということである。それもまたある視点から見た場合の歴史観や価値観として位置づけられるものであると思われるし、相応の経済対策も必要であろう。ただ、そこに当事者としての地域社会の人々の日常的な実践という視点が組み込まれなければいけないということは指摘しておかなければならないわけである。すなわち、牧野（1999）が指摘するように「現在の生活をも含みこむことのできる歴史の担い手は、そこで生活している当の住民たちでしかありえない」（牧野，1999：237）わけであり、半ば自明視されてきた「歴史」を社会的に位置づけなおすには住民の視点が不可欠になるのである。

一方で、本稿で扱ってきた住民の視点による歴史認識もまた、ひとつの価値観や歴史認識を明らかにしてきただけに過ぎない。今後は、実証的な事例分析や理論的な裏づけを蓄積していくなかで、多面的かつ多角的な価値をもとにした「歴史」が明らかにされていくべきであろう。

自然資源をめぐる歴史認識のズレを問い直していくには、さまざまな視点から見た「歴史」や価値観、認識を明らかにしていくことが必要であり、そこから当事者としての地域社会の人々の実際の生活実践から生成されてきた歴史観や価値観がこぼれ落ちてはならない。多面的かつ多角的な価値を明らかにすることで、歴史観の捉え返し、地域社会に根差した歴史認識が可能になると考えられる。そうして明らかになった歴史観を地域社会の文脈のなかに埋め込んでいかなければならないのではないだろうか。

1 本稿では、歴史の見方や認識の仕方として「歴史観」と「歴史認識」という用語を使用する。「歴史」を認識している主体を特定することが困難だと思われる社会一般の価値観に対しては「歴史観」という用語を採用し、「歴史」に対して特定の価値観を持っている主体を判断することが可能な文脈では「歴史認識」という用語を採用する。これは、本稿の中心的なテーマである「歴史認識のズレ」を分析しようとするときに、複数のアクター同士の認識のズレを対象とするものではなく、「歴史」を認識している主体を特定しづらいような社会的に構築された「言説」と、それに対する特定のアクターが持っている「認識」のズレを扱うためである。すなわち、「歴史」に対する特定の価値観を「誰が」持っているのかを判断できるかできないか、ということが用語を使い分ける基準となっている。

2 <http://www.tokunoshima-town.org/>（閲覧日：2012年8月10日）を参照。

3 <http://www.town.isen.kagoshima.jp/>（閲覧日：2012年8月10日）を参照。

4 <http://www.yui-amagi.com/modules/pico/>（閲覧日：2012年8月10日）を参照。

5 「イモ・ハダシ論」は戦後沖縄の米軍政時代における政策論争のなかで生成された言説のひとつである。沖縄大百科事典（1983）によると、「1968（昭和43）年10月の主席公選のさい、保守陣営が展開した議論。即時無条件全面返還をかかげる革新統一候補の屋良朝苗が勝つと〈沖縄は昔のようなイモを食ひ、はだしで歩く生活にもどる〉と宣伝した。米軍基地撤去要求をふくむ革新共闘会議の返還論にたいし、自民党陣営は〈米軍基地本土なみ〉〈当面本土との一体化〉〈復帰後の産業経済のビジョン確立〉をかかげていた。公認候補西銘順治は、産業経済の備えがなく基地撤去・復帰するのは〈イモを食う生活〉を招くというのが持論だった。統治者である米軍の首脳にも根強い基地作物論があった。選挙に先立つ8月16日、アンガー高等弁務官は在沖米国商議所例会で〈基地が縮小ないし撤廃された場合、琉球の経済はふたたびイモと魚に依存したはだしの生活にもどるだろう〉と述べ、経済基盤の確立を強調した。これ

- が選挙戦には極論となって、キャッチフレーズに使われた。」(沖縄大百科事典, 1983: 242)と説明されている。「イモ・はだし論」もまた、「ソテツ地獄」と同様に、選挙戦における政策論争のなかで社会的に構築されてきた概念と位置づけられる。
- 6 2012年1月16日 N.N.氏への聞き取りによる。
  - 7 ソテツ (*Cycas revoluta*) はサイカシン (cycasin) という有毒配糖体を含んでいるため、毒抜きを適切に行わなければ食用には適さない。本文中でも引用した1925(大正14)年8月2日付の鹿児島朝日新聞の「生活難の悲劇 蘇鉄の中毒から 一族六名が枕を並べて死亡 同情すべき大島の惨状」(鹿児島朝日新聞, 1925)という見出しによる記事のような事故は毒抜きの処理作業が十分には行われていなかったことによって起こったものだと考えられる。このような事故を防ぐため、ソテツの毒抜きの方法が別冊で首里王府の高所によって出されている(小野, 1932)。
  - 8 2012年9月15日 T.M.氏への聞き取りによる。
  - 9 2012年9月15日 T.M.氏への聞き取りによる。
  - 10 2012年12月12日 T.S.氏・T.R.氏, 2012年12月13日 Y.H.氏への聞き取りによる。
  - 11 2012年9月15日 T.H.氏への聞き取りによる。
  - 12 ソテツの種子や幹を食用とするときの毒抜きの技術に関しては上江洲(1985)や安溪(2011)などによる詳細な報告があるため、本稿では省略する。
  - 13 ソテツの種子をめぐる現在の社会関係に関する詳細は別稿にてすでに記述しているため、本稿では最小限の記述にとどめた。詳細に関しては金城・寺林(2012)を参照されたい。
  - 14 本文中で検討したことに加えて、これらの地域誌にはまったく同じ文章が掲載されていることや、先に引用した『和泊町誌』(1985)の内容とも記述内容が同じであることなどからも、これらの地域誌に記載されている内容を地域社会の人々の歴史認識として扱うには無理があるだろう。そのため、本稿では地域誌における「歴史観」を地域社会の人々の歴史認識としては採用せず、聞き取り調査をもとにした「語り」から人々の歴史認識を捉える方法を採用する。
  - 15 2012年12月12日 T.R.氏への聞き取りによる。
  - 16 2012年9月15日 T.H.氏への聞き取りによる。
  - 17 2012年3月29日 Y.H.氏への聞き取りによる。

## 文献

- 安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭, 2004, 『沖縄県の歴史』山川出版。  
天城町役場, 1978, 『天城町誌』吉岡為良。  
安溪貴子, 2011a, 「ソテツの来た道—毒抜ききの地理的分布から見たもうひとつの奄美・沖縄史」安溪遊地・当山昌直編『奄美沖縄環境史資料集成』南方新社: 363-404。  
安溪貴子, 2011b, 「『地獄』と『恩人』の狭間で—沖縄と奄美のソテツ利用」湯本貴和編『シリーズ日本列島の三万五千年—一人と自然の環境史 第4巻 島と海と森の環境史』文一総合出版: 225-229。  
伊仙町誌編さん委員会, 1978, 『伊仙町誌』樺山信忠。  
上江洲均, 1985, 「徳之島におけるソテツ利用について」沖縄国際大学南島文化研究所『徳之島調査報告 (3)—地域研究シリーズNo. 8—』沖縄国際大学南島文化研究所: 135-149。  
上江洲均, 1987, 『南島の民俗文化—生活・祭り・技術の風景』ひるぎ社。  
大宜味村史編集委員会編, 1979, 『大宜味村史 通史編』大宜味村。  
沖縄大百科事典刊行事務局, 1983, 『沖縄大百科事典 中巻』沖縄タイムス社。  
小野武夫, 1932, 『近世地方経済史料』第九巻, 近世地方経済史料刊行会。  
小野寺浩, 2011, 「徳之島の力」鹿児島大学鹿児島環境学研究会編『鹿児島環境学Ⅲ』: 47-77。  
鹿児島朝日新聞, 1925, 「生活難の悲劇 蘇鉄の中毒から」8月2日付。  
鹿児島県大島支庁総務企画課, 2012, 『平成23年度 奄美群島の概況』鹿児島県大島支庁総務企画課。  
金城達也・寺林暁良, 2012, 「徳之島におけるソテツ景観の意味—生業活動の組み合わせとその変遷から—」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』12: 印刷中。  
坂井友直, 1917, 『徳之島小史』奄美社。  
榮喜久元, 2003, 『蘇鉄のすべて』南方新社。  
下田将美, 1969, 「琉球よ何処へ往く」湧上豊人編『沖縄救済論集』琉球史料復刻頒佈会: 53-86。

## 徳之島の生業複合から「ソテツ地獄」を問いなおす

- 西部読売新聞, 2008, 「奄美のソテツ 豪で砂漠緑化 飢饉しのぎ、今や地球守る」3月17日付。
- 関礼子, 1997, 「自然保護運動における『自然』—織田が浜埋立反対運動を通して—」『社会学評論』47(4): 461-475.
- 関礼子, 2003, 「生業活動と『かかわりの自然空間』—曖昧で不安定な河川空間をめぐる—」『国立歴史民俗博物館研究報告』105: 57-87.
- 瀬戸内町誌歴史編纂委員会編, 2007, 『瀬戸内町誌 歴史編』瀬戸内町。
- 平英美・中河伸俊編, 2006, 『新版 構築主義の社会学—実在論争を超えて』世界思想社。
- 徳富重成, 1994, 「徳之島の民具と文化(3)—子供の遊びを中心とした—」『雑記集成(9)1994年』潮風出版: 56-92.
- 徳之島町誌編纂委員会, 1970, 『徳之島町誌』徳之島町役場。
- 豊見山和美, 2011, 「ソテツの話」財団法人沖縄県文化振興会史料編集室編『沖縄県史 各論編 第5巻 近代』沖縄県教育委員会: 566-567.
- 仲地哲夫ほか, 1983, 『日本農書全集 34』「農務帳」農山漁村文化協会。
- 新妻莞, 1969, 「琉球を訪ねて」湧上聾人編『沖縄救済論集』琉球史料複製頒佈会: 1-51.
- 国分直一・恵良宏校注, 1984, 『南島雑話 1』平凡社(=名越左源太, 『南島雑話』)。
- 南海日日新聞, 1927, 「貧困に喘ぐ蘇鉄地獄へ 勅使を差遣はさる」8月9日付。
- 西田孝太郎・小林昭・永浜伴期, 1955, 「日本産ソテツの一新有毒配糖体 Cycasin に関する研究」『鹿児島大学農学部学術報告』4: 151-168.
- 西村富明, 1993, 『奄美群島の近現代史—明治以降の奄美政策』海風社。
- 西村富明, 2007, 『検証, 鹿児島・奄美の戦後大型公共事業』南方新社。
- 日本経済新聞, 2008, 「街路樹・砂漠緑化に活用 ソテツの実、海外で人気—奄美で収穫真っ盛り」12月26日付。
- 東村史編集委員会編, 1987, 『東村史 第1巻 通史編』東村役場。
- 福田珠巳, 1996, 「赤瓦は何を語るか—沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動」『地理学評論』69A-9: 727-743.
- 牧野厚史, 1999, 「歴史的環境保全における『歴史』の位置づけ—町並み保全を中心として—」『環境社会学研究』5: 232-239.
- 増田昭子, 2003, 「ソテツの民俗覚書」『民俗文化研究』4: 79-103.
- 盛口満・安溪貴子編, 2009, 『聞き書き・島の生活誌 2 ソテツは恩人—奄美の暮らし』ポダーインク。
- 森田真也, 1997, 「観光と『伝統文化』の意識化—沖縄県竹富島の事例から」『日本民俗学』209: 33-65.
- 安室知, 1992, 「存在感なき生業研究のこれから—方法としての複合生業論—」『日本民俗学』190: 38-55.
- 湧上聾人編, 1969, 『沖縄救済論集』琉球資料複製頒佈会。
- 和田正洲, 1982, 「奄美諸島の農耕技術伝承」九学会連合奄美調査委員会編『奄美—自然・文化・社会—』弘文堂: 103-111.
- 和泊町誌編集委員会, 1985, 『和泊町誌(歴史編)』鹿児島県大島郡和泊町教育委員会。

## WEB

- <http://www.tokunoshima-town.org/>(閲覧日: 2012年8月10日)
- <http://www.town.isen.kagoshima.jp/>(閲覧日: 2012年8月10日)
- <http://www.yui-amagi.com/modules/pico/>(閲覧日: 2012年8月10日)